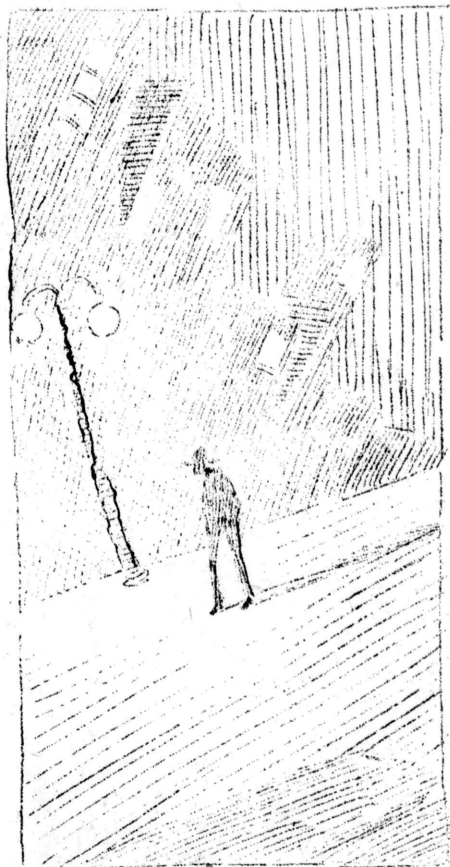


亞
尔
然
丁
時
報

文
藝
云
附
錄

才
世
八
号

才
五
卷



AGOSTO
DE
1930

鷺鷥の答へよ

南米太郎

明月や「カシメ」の娘はらぬり

感なしの泥沼の底にはまりこんだやうな、ねつと
りとした千睡のカマツラ、舞臺を上げて九太小
屋の隙から眺め廻すと森の軒家の周囲は、も
う黄昏近い午後の本意明か陰気な逆光線が、膝
と膝に透けこんで、真晝の回廊壁止の太陽の
直射に毒々しく燃えひろがった。立ち並ぶエ
ルドラガの花もはたなくうざだれ、立ち並ぶエ
ラチヨの梅の隙間には、はや血のやうな夕焼の
色づくつきり滲み出た。
いやに奇怪な大事件でもおつはしまりやうな
予感の前必つてする蒸し暑い空気が、
やう言へばさつき、夢うつに妙なる声を聞いた
やうだし、気のせい、砂の上に新しい足痕が森の
やうからしくつづいてるやうだ。
いや天張り気のせいだ。
すでに慢性に打ちつづける性急な症の発作
がいつもこんな不安な台書の夢魔を、うつら上
げるのだ。
「善き友が親切にすゝめてくれたカクタヌの真赤
に熟した果実を毎日煎じて飲むことにするぞ
やあ。」

それにしてもしつきの人声は、
落ちついた三月の薄明にそむいて、又もや奇ら
しく、昔の遺念で、でりこんだ迷走神経を
揺さぶるやうな瞬間。

THE CCHER MOON
SAH-TAH-TA-HA...

だしぬけに、だらしの、聞き慣れない声帯が
軒先のアルカロ木の太木の上に震動した。
びくつきりして、鉛とほめなつら小屋から飛び出
ると、その枝の上には、初め、人も人同様にしたや
うな鷺鷥が、小生煮気な小首を傾けて、凝つと
見下ろしてゐるではないか。
毎朝、朝から、時には私が寝苦しい夜の安息が
ら醒め、きらん前に、こゝへ来て、さやく、安眠を
妨げたり、多くも、甘いマリスを、片つはしから、盗
み食する、口の、群の一羽に、相異なる、と思つ
た、う、足下の、棒切を、拾ひ、上げ、いっつも、のやうに、地
りつけた。
清く、米五郎は、其当時、空気が、田園生活に倦
き、倦きして、チエツ、人生わづかに、世に、だ!!、こん
な山奥に、どろろと、巻いて、たつて、始まらぬえ、
いつ、また、マント、グロス、へ、舞突つて、ダイヤ、モン
ドの、塊に、けつ、まづ、く、幸運に、でも、め、ぐり、會は
う、それ、でも、ブエ、ス、へ、下つて、ロテリ、マ、買つて、百
万長者に、なつて、フラン、セ、イ、でも、抱、か、う、と、毎日
尻より、も、果敢、ない、夢想を、タバコ、の、煙と、一、緒に
描いて、ゐた、が、結局、い、と、なる、と、井、戸、端、へ、ハ、ケン
に、一杯、の水を、汲み、に行く、のも、遠、切、が、つて、南、米の
巴里、ブエ、ス、アイ、レス、発行、の、時、刻、と、羽、太、博
士、著、の、遺、愛、と、性、急、な、ん、て、は、が、り、カ、マ、に、お、そ、へ、つ、た

なりで耽讀して、ローフロと野生のヴェルドラガの葉で辛うじて露命をつないでゐたのであつた。ところがさつきのローロだ、不意を喰らつて人間のやうな不気味な悲鳴をあけ下ら林の奥へ逃げ去つた。

「まアみやがれ!!」
チマコの初秋を想はせる爽やかな微風が、空の隙を渡つて東の空に十三夜の月影を浮べ、野良犬の遠吠とサルトタの棒の響の攻め鳴らす角笛の音、夕霧の奥から聞こえて来ると、急に空を感して無性に肉が食はたくなつて来た。でレミントンと肩にマチエテを腰に夕飯の肴を射ちに出かけた。

行手の羊齒の叢の蔭や、ほてんとカレドの密生した森の木下闇に、知る如美しい野良犬と肥つた野豚と高價な毛皮の上猫の群がうじやうじやうたまり合つて、恐れ戦いて腰を抜けて逃げ出すへたばつてゐるやうに思はれ、抜足で近づくと、彼等も絶対絶命、紋那糞を垂れ流して、算を乱して逃げ隠れるやうな氣が、今夜に限つて馬鹿にしてしまつたやうな、そこに居るべき運命がニタニタ気味悪く笑ひながら待ち受けてゐるやうな、夢にも思はずあたるの暗くなるのも構はず、足はひとり、奥へ奥へと進んで行く。

したグワジマビ樹の下で、私は愕つて立ち止まる。十三夜の月影と、マルテへ續く原始林と、丈余のカデジヨの青がめたスクリンと、背景に一人の王女が二人の腰元を従へてすつくと立つてゐるではないか!!
姫君はローロの羽毛のやうに濃く緑色の上着に緋の袴をはき、たけなす黒髪を赤い布で包み、草の草靴を穿き、二人の腰元は頭に素焼の水鏡のせ、黄色の月見草の花束を捧げてゐる。
更に驚いた事には、さつきのローロが王女の肩に止まつて囁けるやうな目付で、私を眺めてゐるではないか。
この忽然として大地がら湧いた活人画の前に茫然自失、肩のレミントンと上り落とす所だつたが、相手が高の知れた娘、群れと睨み合はす共、に、泡食つて血迷ひかけた、サンブレリアアを將下丹田と辺にぐつと鑢血させ、美しい口髭の下に無理に微笑を作つて、さして静かに吃りながら火蓋を切つた。
語るを聞けば、彼女はもとこの地方の先住民族、今では悲しい故郷喪失者だ、古木古木にあつては光栄ある歴史の教々を有した由緒ある塔、婆家の王女と判つた。
今晚この奥のチマルコの畔まで直軍して来て、そこに野営するにつき飲料水を徴發に小生の井戸へ向ふ途中のこと。
去ふまでもなく、悦びと光栄の念を以て彼女半に奉仕すべく、切角の獲物を見のぞいて後に従つた。
(つづく)

隨想 フリージア

過去の傷ましい思い出は、失望と焦燥と
惱亂と、只それだけだ。余りにも不甲斐な
い私への当然の報酬とは云へ、生れてはし
めて得た私の桃色の夢を、むさうにもこ
んに叩きのめされ様とは……
人の世はあまりに苦しみが多く、悩みが
ある。其の苦しみ悩みを、ちつと耐えて行く
に、人生の深みがある。と云ふこともよくた
びたび聞かされた。昭和娘の、もつ朗うた
さ、積極性も、人生の扉の前には、所詮は何
の勇氣も消えてしまった。絶えず疾速と叫
び、沈黙の反抗……これが、只一つ今の私に残
れた、すべての人々の、みぢの私を過去を
護る武器である。
この反抗は、どんなに善良な家人と不愉快
がらせ嫌悪せられるが、言ふことを、知らぬ
私では、ホカッたが……
あまりにひどく、たゞのめられた身に、同情
と言ふ言葉を受けるとは、あまりに、たゞな
な私……なまじつかな同情、手でもた
やがされては、親しい人達に、まで私は、
づんでしまった……

あ、魂の素直さを失った今、大木篤夫氏の
火酒の嘆きも、もう一度よみかへさう

わすれがたなき悲が、
わすれはつべき、披ゆを
夢に会ふとも、かくに
散らふ花火と君を見む
胸に炎は燃えながら
つひに消すべきか、せしうよ
胸の炎を消さんため
白き、銀河のひらのきを
夏降る雪とわれは見む

(三〇八・三〇)

短歌

悪を得し友に フリージア

よるこびに、雑やぐ君の、さんはせの
こと、にうるはし、朝はらけか、
悪を得し親しき友に、こはぎの
心を、こめて、我は、贈りの
うつくしき、君が、み肌を、ガッヤッせ
我が、贈りたる、真白き、うでわ。

この頃 フリージア

思ひ出の扉の前にうづくまり
涙ながり泣きぬ愚かしき子は
苦しうに狂はんとする弱き子と
君すくひませ思ゆるしませ
今日よりは我があくがれも消うせて
涙はらうて立たんと思ふ
走ひませし母を思へば失ひし
あはきまほろしおしくもあらじ

詩 妹の死 蘇南

唯一人の可愛い妹は
此の世と別れた姿だ
遠い異国に住む兄の名を
此の世から去つて行く其時
唯一言と神に祈つた
嗚呼！帰らぬ再び帰らぬ
可愛し唯一人の妹が……
幻に浮ぶも姿を見る事が出末ぬのだ

短歌 雑詠 晩茶

昔の思出が胸にはいびきまつて
果てしなき海原を待望の渡り
自分の心も体も宙に浮いた
日陰者の生白い頬に
湯のような熱い涙が……
苦しげにこぼれはみ出した
苦笑と微笑に目を送つて来たが
なやましい春の陽を浴びて
苦悶と哀郷に一日は化して行つた
一九三〇・九・二一

雑詠 晩茶

為す業のあまりに多くなす事
あまりになくて日は暮る、かも
今に見ろ今に見ろとて走の地さし
父なつかしや灰色の空
ツハリ見る波の路に花まきて
春を歌はん母の必勝に
夜もひるも花に寝起きの楽しみも
苗の娘 恋なやまらん。

「ロース・マリ」のふさわしい結局のさびしい味にはちがな
 舞台はカナダのロッキーマウンテンをそれら偉大なカナ
 ダ人達、
 マンミーが優々活動の題材とする騎馬警官の赤衣
 にも神韻の精がこめられている。
 「天張り神韻」のナールと私を三嘆させるものさ
 びなのだ。この味があつてこそ、全通して第十場
 と云ふ目ぐるましい場面轉換をも永々とやっての
 けたのであらう。
 短でこの場面轉換だが、これは可成り活動の最
 響を受けてゐると私は思つた。それも悪い意味で
 なく、いい意味である。
 暗転の場合、その闇を林だけ有効にま
 して警官達のカムフラメントの気分を表現するあた
 り非常に面白いと思つた。
 最後の大話も非常によい。テラニウラーそのまゝだ
 らしいや味がない。
 まだ、書き出したら切りがよいがあまり長く
 なるからと先づこの辺で切り上げる。
 唯最後に同好の志は一度、コリエンテス街のテマトロ
 オペラへ行つて御覧なさいと責任をもつてお薦
 めして置かう。
Memories de amour の三幕合
 本んが一度聞いたら不眠症の方でも二日熱しの
 安眠が来ませう。
 佛蘭西語が判らないつたマカヌーダ・チエー位
 のカステリヤンは混るんだからそれ程心配したも
 ちでもありません。私も同じことを同好の志に線
 り及べします。マカヌーダ・チエー！
 (おわり)

サルティン 秋嶺

うす暗い工場の中で
 パンと燃え盛る酷熱を浴び
 尊い汗と血の塊は
 馳せ街々に彷徨の虫した
 何処の会社にも生れて成長したのが
 びかく、光る一つのサルティン
 街々の店頭に姿を現はし
 雑多な人の手に渡つて行つた
 ジーゾーと熱したマンテカに
 気持よくピンフェーザ咬る
 湯気の立つたま、血に乗つて
 腹もふくれよと美味に戴いた
 冬の好物すき焼御膳
 一杯のビールに喉をほらし
 舌を焼くやうなすき焼に
 晚餐に心良く喉を通した
 唯だ一つのサルティンが
 心も働くとほ驚いた
 之も尊い汗と血の塊で
 幾多の苦難を経た賜なのだ
 一九三〇・八・二四

厭ぢやありませんか 彦左

近頃日本ではやけに尖端と云ふ言葉が流行つて何んにも尖端の二字をくっけないとおさまりがつたらしい。いやこの尖端文字を口にしなさいと時代の尖端から断然けとはされるんです。

さでこの尖端の前に流行つた言葉に「厭ぢやありませんか」がある。薄ら或晩フロリダ街を彷徨していると南米の巴里マリスのモホを以て任じてゐるOさんと云ふ至つてハカカオの男僕に向つて「君やぢやありませんか」云々を聞いてゐる。その昔十六オに於いて飛脚屋の初陣に功をあらはした彦左生れつきの頁「す嫌ひぢやなく」と頭を上げ知らぬと云ふもムカツ腹が立つたので「何んですか？ 断然どうううしたんですか？」と云つた。Oさん「明々と大笑一番「彦左と云ふものはガッ……今度鼻の先で笑つた。もあらうものガッ……断然やぢやありませんか」テナ種にさつた俺は「断然やぢやありませんか」眼をバモンナイガイカイトと云ふとさしたらOさん「眼をバチバチ何時の間にかやらんごみの中へ姿を消してしまつた。」

段々世の中が變つて来ると浮世絵でもた様やチポニマニヤは女にもまなくなる。その反動として昔シネマの水夫と山男とかの役を仰つてゐる年々キストラで一生浮ばれたいだちうと思つてゐる大尺豊の鼻のめん曲つた鬼の様が体格の持主の憧れの的になつて来た。彼女等曰く「ニヤ」したコシニヤクのお化の様も男には大華な貞操はまっくれません。

断然ラモンナバロの好きで「子嬢誰が何んと云つてもナバロの映画を……」と見に行く。又ナバロの集める事には於て尖端を行く天晴れモが「独りよがりでゐるが或日悪戯心の起つた俺は「つらつらつてやらう」と「Bチヤン・ジョー・ダ・バンク・ロットの今度の特作Xを見に行かないかい？」と誘つたものだ。「まア、バンク・ロットなんぞ野蠻な男、聞いたら「胸が震るくなるワ」「NONO、処ガその映画にナバロが端役で出てゐるワ」「あらほんと？ シンバウナバロが端役になんて……」

(E) (F)